

『新しい学校』一九五四年八月(興文館)

■教育時評

はばまれている 教育の民主化



最近私は、京浜地帯の某大工場がもっているその工員の技能者養成所を定時制高等学校に認可してもらおうとした所が、その地域の私立学校の人たちがこれに反対してどうとお流れになりそうだ、という話を聞いた。

この工場の技能者養成所は、誰も認める程度の高い教育を行って居り、なまじつかのこれらの高等学校よりすぐれたものであるというのは、定評がある。一体現在の一般定時制高等学校は、怪しげなのが多いのであつて、すぐれた工場の技能者養成所の方が、遙かに教育的機能を果していることは、一般に認められている。ところが、これがなかなか問題をもっているのです、その養成所が、高等学校として置かれていないため、一種の袋小路的なものになっている。

養成所を出た優秀な工員たちは、実質上工場の中堅として、活確しているのであるが、彼等は遺憾ながら、公式の学歴の上では、大学まで進めないものである。一般に大学の卒業者は技師として工場に入ってきて、養成工出身の連中の上にするのである。自分の同期のものが、高等学校、大学を経て工場に入ってきたとき、自分は中学卒業後の同じ七年間を養成所で教育され、その卒業後は中堅工員として四年も働いて相当のものになっている。にもかかわらず自分は大学卒という学歴がないため、もうそれでいきづまりである。仕事の上で創意工夫をして、その才能をのばすチャンスにめぐまれず、おさえられてしまう。そうしてその後、中学の後輩の者がどんな自分より重要な仕事をする地位にいくのである。いわば軍隊の下士官であつて、どうしてもその間には断崖があるのである。

もしこの養成所が高等学校と認められ、そこから大学へ入る道が開かれ、さらに大学が働きながら学ぶという人々のために、夜間の講座でもつたらば、どうであろうか。これは勤労青少年教育にとって、たいへんな革命であろう。工員自身はそれによって、自分の努力次第ではどんな創意工夫を働かす

ことの出来る、より高い地位につくことが出来、人生のいきづまりを感じることもないであろう。そうして、これは工場にとつても、たいへんな合理的な人事管理が出来ることなので、大歓迎であろう。場合によっては、工場は、自分の養成所―すなわち高等学校卒業者を大学へ研究に出し、それによって能率を上げることが出来るのである。

最近大工場側で夜間に大学の開放を要求する声が多いが、それはこういう雰囲気であらわしている。しかしそれよりもたいせつなことは、前提としての技能者養成所のすぐれたものを高等学校として認める、ということであろう。

ところが、これはそれだけにとどまらない。もしこういうことが次第に充実してきて、多くの工場で高等学校が設けられることになれば、実質上働きつつ学ぶことが確立するから、家庭の事情などによって高等学校へ進むことが出来ない者も、自由に勉強することが出来るようになり、真に人材を社会に働かせることになるのである。

更にそういうことになると、能率の悪い現代の高等学校教育よりは、工場内の学校の方が最も進歩した環境で産業教育を行うこと

が出来ようになるから、最も近代的な教育機関が成立することになるのである。

高等学校の普通課程などという妙チキリンな準備機関の学校などは、およそナンセンスだということも、はつきりするであろう。今は工場の技能者養成所は、主として技術教育をのみやっているが、あれだけ近代的な設備の中で行っている技術教育の段階は、今の高等学校などは問題にならぬのである。そこで、もう少し視野をひろげて、少し時間をさいて普通教育に力こぶを入れたら、普通教育の能率もまた段ちがいのものになるのである。社会や自然のことでも、何しろ具体的な産業的地盤があつて、それを材料にして学ぶことが出来るようになっていいるから、能率はまるで違うことは火を見るより明らかであろう。

こうなったら全然、高等学校教育は面目を改めて、入学試験などをうけてそんな所へ行かなくなるであろう。いまわしい試験準備などというものは、姿を消すのである。こういう意義のある技能者養成所の高等学校認可を、どうしてしないのか、聞くところによると、それは利害関係で、その工場に定時制の高等学校を認めると、その辺の私立学校へ来ているその工場の工員をとられるからだ、と

いうのである。ああ、こうなつてはもはや、何をか言わんやである。教育の任に当る者自体が、教育の理念を汚しているのである。

現にその技能者養成所の生徒達は、昼はそこで教育をうけ、夜はつまらぬ定時制に行っているのである。重労働を、この青少年達に課しているのは誰なのか。教育の民主化をはばむのは誰なのか。

(矢口 新)